

中世権門寺社の材木調達にみる技術の社会的配置

高橋一樹

中世前期を中心に

The Social Positioning of Technologies Seen in the Procurement of Timber for the Temples and Shrines of the Ruling Elite Focusing on the Early Middle Ages

TAKAHASHI Kazuki

はじめに

- ① 中世荘園の形成と柚山の確保
- ② 流通商品材の展開と造管用材調達方式の転換
- ③ 中核的集散地にみる技術の社会的配置の変容
おわりに

【論文要旨】

本稿は、中世後期を中心とした材木（造管用材）の生産・流通・消費に関する先行研究の成果をふまえて、中世前期における権門寺社の造管用材調達システムの変容と、その背後にある技術の社会的配置のあり方を論じた。

その結果、古代末期・中世成立期を通じて展開した畿内周辺における材木の交易活動の発展のうえに、広域的な流通商品材が発展していくのにもない、十三世紀後半を画期として造管用材調達システムが転換することを明らかにした。そうした動きの背景には、物資の集積・備蓄・売買にとどまらない中核的集散地のはたす社会的機能の変化があり、ここでは広義の製材加工に属する技術とその担い手が成長するとともに、同じく木材を使用する他の生業との併存関係についても問題提起を行った。

同様の視点は山林や都市の建設現場においても適用が可能であり、中世における材

木の生産・流通・消費のフローが、都鄙間においておおまかに成立してはいるものの、その各要素は比重こそ異なるにせよ、柚山・中核的集散地・建設現場それぞれの場で複合的に存在しているものである。その意味で、中世社会は、「製材」や「運送」といった技術が特定の空間・人材に固着しながら完全な社会的分業として成立しているとは言い難い側面を抱えていることも看過しえない事実であろう。

これらの中世の材木をめぐる生産・流通・消費の複合した各局面で技術の具体的な行使・継承と一体的に存在していた呪術的行為については、論及した史料の分析を含めて今後の課題とした。

【キーワード】中世・材木・技術・寺社・生業